

川崎市社会教育委員会議による提言書

協働の学びを求めて

- 市民自主学級の事例研究から -

平成20年(2008年)3月

川崎市社会教育委員会議

目 次

はじめに	1 p
第1章 市民自主学級の調査		
1 市民自主学級とは	3 p
2 年間のスケジュール	3 p
3 調査目的・方法等	4 p
第2章 過去事例の市民意識実態の概要（過去企画者アンケート調査より）		
1 市民自主学級開設の趣旨及び目的	7 p
2 企画提案会に向けての取り組み	7 p
3 企画提案会	8 p
4 共同企画者、参加者募集段階	8 p
5 市民自主学級の企画段階	9 p
6 市民館職員との意思疎通、連絡方法	10 p
7 市民自主学級の運営	10 p
8 市民自主学級の企画・運営を終えて	11 p
9 全体的な特徴	12 p
10 企画・運営の仕組みの改善案	13 p
第3章 企画者からの聴き取りによる市民意識実態の概要		
1 企画提案会に向けての取り組み	14 p
2 企画提案会段階	15 p
3 共同企画者の募集段階	15 p
4 職員との関係	15 p
5 企画者と参加者のつながり	16 p
6 その他	17 p

第4章 職員の意識実態（職員へのグループインタビューより）

1 各市民館での市民の参加に関する全体的傾向	……………	18 p
2 企画書作成の段階	……………	18 p
3 企画募集段階	……………	19 p
4 企画提案会段階	……………	19 p
5 企画委員会・学級運営段階	……………	20 p
6 市民自主学級の仕組みについての評価	……………	22 p
7 職員の課題意識をまとめてみると	……………	23 p

第5章 市民と職員の意識実態への考察	……………	24 p
--------------------	-------	------

第6章 キーワード視点からの提言

1 キーワード視点からの問題整理	……………	27 p
2 今後に向けての提言	……………	30 p

おわりに	……………	33 p
------	-------	------

参考資料

1 フィールドワーク実施状況一覧	……………	35 p
2 調査帳票・統計		
(1) アンケート項目	……………	35 p
(2) 聞き取り調査項目	……………	38 p
(3) グループ・インタビューの概要、質問項目	……………	39 p
3 社教委員活動		
(1) 2カ年の活動経過	……………	41 p
(2) 2カ年の委員名簿	……………	43 p

はじめに

川崎市の社会教育委員の会議は、2年間の任期中20回を越す定例会を行い、教育委員会からの諮問への答申はもちろん、諮問のない任期には川崎市の社会教育が取り組むべき課題を社会教育委員自らが発見し、現場に足を運び、研究した成果をまとめ、教育長を通じ教育委員会に提言する活動を連綿と行ってきた。すなわち「市民の主体的な学習や市民活動の自立への支援」「学校教育と社会教育の融合」「家庭・地域の教育力の向上」「地域社会の再構築」「市民と行政の協働推進」などを提言してきた。これらは、時代を先取りする視点であったと自負している。

しかしながら、こうした先進的な提言は、現場において果たして実効力を持っていたのだろうか。目指すべき方向に実情は向かっていたのだろうか。こうした疑問から、私たちは平成18・19年度の任期を、これまでの提言結果を検証する時期と位置づけた。新たな提言を出すのではなく、今までの提言等が社会教育現場にいかにか反映されたのか、反映されなかったのか。反映されなかったとしたら、それはなぜかを明らかにしようと試みた。

検証にあたり、まず過去12年間(平成6・7年度～平成16・17年度)の提言¹を要約・整理した。その中から複数の提言に共通し、特に検証が必要と考えられるキーワードを取り出した。

その結果、以下の5つのキーワードが明らかになった。

- 「協働の意識の醸成」(市民と行政が協働していく意識をいかに作り上げるかの取り組み)
- 「行政支援の考え方」(市民活動の育成を支援する取り組み)
- 「個人利用者と市民活動の結びつけ」(個々の市民が出会い市民活動へとつながる取り組み)
- 「地域の子どもの参加促進」(地域活動への子どもの参加促進への取り組み)
- 「コーディネーター、中間支援組織の育成等」(人と人をつなぐ、キーパーソン、行政や地域の活動をつなぐ中間支援組織育成等の取り組み)

そこで、現在の川崎の社会教育事業をこのキーワードの視点から見て、どのような課題があるのかを検証することとした。

手続きとして、まず、対象となる事業を設定した。それにあたっては現在取り組まれている教育委員会所管の生涯学習事業全体の中から、5つのキーワードすべてを内包し、更に、全市で展開されていることを条件とした。最終的に、教育文化会館(川崎区)並びに他区の市民館(以下、市民館と総称する)同分館で実施されている「市民自主学級」事業(以下「学級」)が今期の調査対象となった。

「学級」(詳細は第1章参照)とは、平成15年度から開始された事業で、地域や社会の課題解決に市民自らが取り組んでいく上で必要な学びの場を、市民の企画運営によって作り上げていく学級である。

¹ 平成6・7年度『市民の主体的な学習の援助をめざして』(平成8年3月)
平成8・9年度『地域・家庭の教育力を活性化するための方策～社会教育の視点から』(平成10年3月)
平成10・11年度『社会教育施設における市民活動の支援と連携のあり方について』(平成12年4月)
平成12・13年度『こどもはつらつおとないきいき～学校・家庭・地域をつなぐ川崎の教育～』(平成14年3月)
平成14・15年度『市民活動の成熟をめざして～地域での自立と連携～』(平成16年3月)
平成16・17年度『地域社会の再構築 エリア・ルネッサンス』(平成18年3月)

前記キーワードとの関連で言えば、次の諸点が指摘できる。

市民による市民教育的要素をベースに行政との協働によって企画運営されるため「協働の意識の醸成」、「行政支援の考え方」の検証に適していること。

各館で多種多様な学級が展開されているため「個人利用者と市民活動の結びつけ」や「子ども達の参加促進」の検証も可能であること。

学級や講座を企画運営することで力量を伸ばした市民が次の市民を育てていく等の要素もあり、「コーディネーター、中間支援組織の育成等」の検証も含まれること。

「学級」の開始以降、数年を経過しており、評価可能な時期であること。

なお、これまでに実施された「学級」は膨大であるため、今回の調査では7館ある市民館の「学級」のみを対象とし、そのうち平成19年度に実施中または過去に実施された「学級」の企画者や参加者(ともに市民) それを協働し支援する市職員を対象に調査を行った。

調査の手法は次の3つである。

昨年度までの「学級」の企画者に対するアンケート調査

「学級」担当の係長級を中心とした市職員対象のグループ・インタビュー

今年度の「学級」企画者に対する聴き取り調査(以下、「フィールドワーク」)

具体的な手法については第1章3を見ていただきたいが、検証の趣旨はあくまで「学級」の企画・運営に5つのキーワードがいかに反映されているか、またはされていないか等の実態についての調査であり、各「学級」の企画や運営の良し悪しを評価するものではないことを申し添えておく。

今回の研究提言書の構成は6章となっている。

第1章では「学級」の概要と調査方法の説明、第2章では過去の企画者へのアンケート調査からの市民意識実態の分析、第3章ではフィールドワークにおける市民意識実態の分析、第4章では職員へのグループ・インタビューからの職員意識実態の分析、第5章では市民と職員の意識実態の考察、第6章では「学級」のフィールドワークおよび、今回の「学級」に関する調査全般をキーワードに基づいて検証し、9項目にわたり提言を行っている。

いずれの調査も社会教育委員が論議を重ね、調査項目を作成し、社会教育委員のほぼ全員が現場に赴き、事業展開の最前線を肌身で感じながら取りまとめたものであるが、今こうして作業を終えて振り返るとき、検証までの作業や論議の積み重ね自体が、社会教育委員自らの学び合い・育ち合いの道程でもあったことを深く感じている。

このように、現場を踏まえた研究成果であることに本提言の価値があると考えます。関係各位におかれましては、この提言を十分に重視し活用していただきたいと願うばかりです。

第1章 市民自主学級の調査

1 市民自主学級とは

(1) 概要

川崎市の「学級」は、地域や社会の課題などの解決に向けた市民の学習の場づくりを、市民からの企画提案に基づき市民と行政が協働して実施することを目的としており、教育文化会館・市民館・分館全13館で実施されている。

「学級」は、継続的な学習を通して、地域や社会の課題解決に市民自らが取り組んでいくための知識や技術を習得し、地域づくりへ参画するきっかけとすることを目的としており、5～9回からなる短期学級と10～15回からなる長期学級がある。

(2) 経緯

平成14年度に教育文化会館・市民館・分館事業の見直しがなされ、翌15年度からは、公的社会教育の目的である市民の社会参加やまちづくりの活動を支援し、市民の参画能力・自治形成力を高めていくことを主眼とした「新しい方針～3つの基本方針・5つの柱～」に基づき、新たな体系の下で事業が実施されることとなった。この新しい方針の中でスタートしたのが「学級」である。

過去5年間で「学級」は253学級開催されており、テーマも子育て、環境学習、多文化共生など多分野にわたっている。

(3) 実施条件

「学級」の企画提案は公募制となっている。提案者は、応募する区を主な活動場所とする5名以上のグループもしくは個人が原則だが、企画提案が少ない場合や提案内容に偏りがあるような場合には市民要望等に基づき市民館が提案することもできる。ただし、個人及び市民館からの企画提案を実施する場合には、5人以上の企画運営委員会を組織することが条件である²。

また、同一企画者からの提案は3年が原則だが、企画提案の内容・性格から地域の学習課題として継続して実施する必要があると認められるものは3年を超えて開設することができる。

2 年間のスケジュール

(1) 企画の決定

年度当初からの円滑な事業運営のため、前年度中に「市政だより」やチラシ等で広報を行い、市民

²この場合には、採用決定後「市民館だより」等で企画運営委員を募集する。

からの提案を募集、確定する。企画案の提出にあたっては、各市民館で事前説明会を開催し、「学級」の趣旨やスケジュール等の確認を行うほか、「学級」のテーマや実施方法等の個別事例についての相談を受け付けている。こうして提出された企画案は、各館で館長を議長として開催される「企画提案会」で市民企画者どうしの合議により採否が決定される。

(2) 「学級」の企画・準備段階

メンバーが確定したところで企画運営委員会を開催し、職員とグループが「学級」の開催日時、会場、プログラム、実施までのスケジュール等を決定する。それに沿って講師との打ち合わせ、必要機材の用意、当日の役割分担等の準備を進めていく。

主な広報手段としては、職員とグループが協働で作成・配布するチラシがある。市政だより、市民館だより等にも募集記事を掲載している。

(3) 「学級」実施・報告

当日の運営はグループが主体となるが、各回の終了後にはグループと職員で当日の振り返りと次回に向けた打合せを行うなど、両者の共通認識を深めながら回を重ねていく。

「学級」の終了後、各グループは、『報告書』を市民館に提出する。

年度末に各館で開催される報告会（生涯学習交流集会の中で開催）では、「学級」を開催した全団体が集まり、「学級」の実施状況等の報告及び他の市民グループ等との情報交換を行う。

【学級実施のスケジュール】

月	内 容
1月上旬	市民館にて企画提案用紙配布開始
下旬	事前説明会
2月中旬	企画提案書の提出締め切り
2月下旬 ～3月上旬	企画提案会 実施決定
4月～3月	企画運営委員会の開催 契約手続き（計画書・予算書等を市民館へ提出）
	学級の実施
	実施報告を市民館へ提出
2月	報告会

3 調査目的・方法等

(1) 過去の企画者へのアンケート調査

目的

アンケート調査の目的は、3点ある。ひとつにフィールドワーク調査対象が各館2学級のみであ

ったため、より多くのデータを集め、調査の信頼性を高めること。第二に、フィールドワークの時点では、「学級」が企画・実施の途中であり、過去に「学級」の企画・運営を経験した企画者の声を聞く必要が感じられたこと。第三に、過去の企画委員の中には現在「学級」を離れた人もあり、直接聴き取りを行うことが困難であったこと。以上である。

対象

以前、「学級」を企画・運営したことがあるグループ等をアンケートの調査対象とした。今期も継続して行っているグループを含んでいるが、フィールドワークで聴き取りの対象としたグループは除外した。

方法

実施にあたっては、個人情報保護の観点から、教育文化会館・市民館の職員等が手渡せる範囲で、趣意文、アンケート用紙、返信用封筒を各グループに配布し、記入後に事務局まで郵送する方式をとり、結果、29件の回答を得た。（質問項目は巻末参考資料2（1）参照）

(2) 社会教育委員によるフィールドワーク（聴き取り調査）

目的

社会教育委員が実際に聴き取り調査に行くことで、「学級」の実態すなわち「学級」の企画・運営の現状、市民企画者や担当の市民館職員がどのように感じているか、課題があるとすればそれが何か等への理解を深めることが調査の目的である。

対象

調査対象の選定に当たっては、各館で比較的共通に実施されている子育て関係の「学級」から必ず1学級を聴き取ることにした。その他に各館で特徴的に実施されていると思われる諸「学級」のうち、協力を得られた1学級からも聴き取り調査を実施した。つごう、各館2学級ずつ合計14学級、内訳は子育て関連と「特徴的な学級」が各7学級であった。

方法

社会教育委員が便宜的に「南部」（川崎区・幸区・中原区）、「中部」（高津区・宮前区）、「北部」（多摩区・麻生区）の3チームに分かれ、平成19年7月～8月にかけて、企画運営の打合せ等の現場に赴いて見学や聴き取りを行った（聴き取り調査の日時等については巻末参考資料1参照）。

調査にあたっては、市民と職員との率直な意見が聞けるよう、原則として別々の場所で聴き取りを行った。聴き取り項目については事前に社会教育委員会議において設問を練り、共通の内容で行うようにした。（質問項目は巻末参考資料2（2）参照）

フィールドワークの意義

聴き取り調査では、7、8月という実施時期の関係で、十分な情報を得られない不備もあったが、運営の実際を社会教育委員が実際に見、和気あいあいと車座になりながら聴き取りを行ったところもあり、市民や市民館職員の思いや本音を実際に肌身で感じることによって、「学級」についての理

解を深め、認識を共有することができた。

なお、上記アンケートは過去の企画者による自己評価であるが、フィールドワークは、社会教育委員による客観性が加わった調査となっている点で異なる意義を持っている。

(3) 職員へのグループ・インタビュー

目的

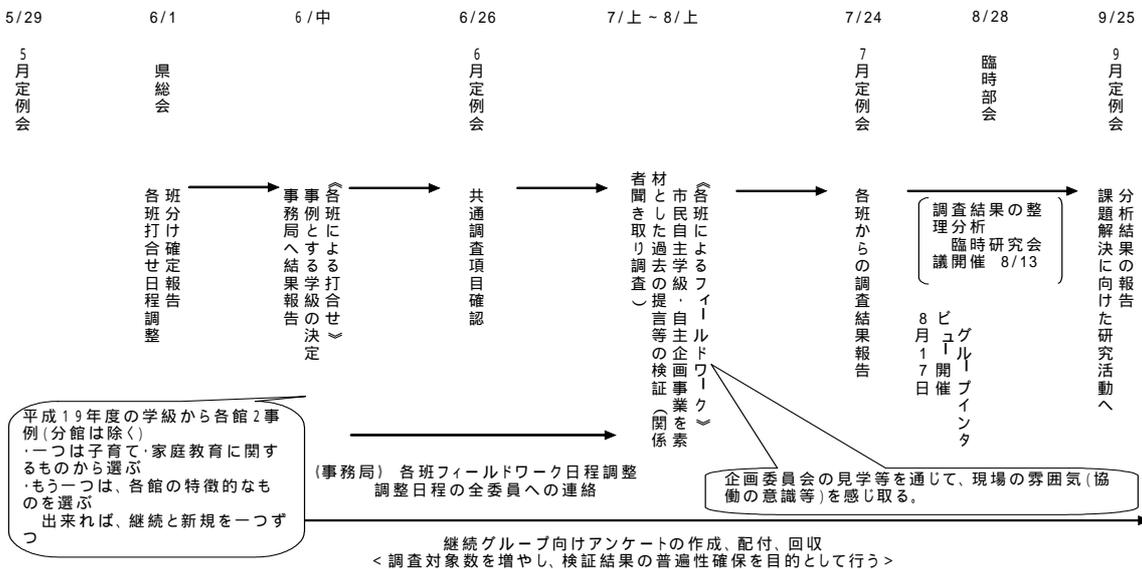
現在の「学級」の担当者である職員は、新人であったり、初めて「学級」を担当する人であったりと立場もそれぞれ異なる。また、この5年間で250余りの「学級」が実施されてきたが、フィールドワークで聞き取りを行ったのは、1館あたり2学級だけに限られている。そこで、これまで「学級」をみてきたベテラン職員によるグループ・インタビューからの聞き取りで、不足を補うこととした。

また「学級」フィールドワークの結果や、市民館の担うべき役割等についての職員の意見を聴いて、市民と職員の意識差を明確にすることができると考えた。

方法

各市民館から、「学級」を総括的な立場からみてきた職員一人に出席してもらい、質問項目（質問項目は巻末参考資料2（3）参照）に基づき、それぞれの考え方を述べてもらい、議論を交わした。

市民自主学級の検証活動の流れ



第2章 過去事例の市民意識実態の概要（過去企画者アンケート調査より）

1 市民自主学級開設の趣旨及び目的

それぞれのグループの企画テーマは、子育て支援や子育てのネットワーク作り、地域の自然・歴史・文化・環境に関する学習、防犯・食育などの地域課題解決、地域活動デビューやコミュニティ形成のための仲間作り、障がい者の社会参加支援、異文化交流など多岐にわたっている。そして、自分達の企画を具体化し、役に立ちたいとの想いが感じられる。また、特に子育て関連の企画者には、過去に乳幼児学級等に参加し、それらの学級を継続することに社会的使命感を感じて、自分も企画に参加してみたいという事例が多く見られた。

2 企画提案会に向けての取り組み

(1)行政からの「学級」募集チラシについて

事業の趣旨や年間の流れや仕組み等について、チラシが分かりやすいという回答が75.9%³であることから、全体としては市民に理解しやすい内容構成になっているが、分かりにくいとの回答も9グループから出ている。その理由として、「学級」と他の事業との違いが分かりにくいことや、区による対応の違いなどが挙げられた。特に初めての応募者にとっては、「市民館事業などを経験していないとシステム等が理解しにくい」という回答に代表されるように、最初に流れを説明されても具体的なイメージが浮かびにくいようである。

(2) 事前相談とその内容

全体の8割のグループが事前に相談したと回答している。特に市民館職員と旧知であると直接相談しやすい。そうでない場合は、先行経験者の市民に相談している。相談内容は、自分たちの企画内容が「学級」の趣旨や地域のニーズに合うかどうかが多く、その他、運営そのものへの不安や、数年継続している中で今までとどのような点で違いを表明すればよいか、区をまたがる運営が可能かどうか、日程の立て方、講師の紹介や交渉の仕方、企画提案会の進め方など様々である。こうした相談への市民館職員の対応について聞いたところ、「良かった」と回答しているのは19グループで、逆に「良くなかった」と回答しているのが6グループであった。良かったという評価の視点は、「理解してくれる、親身になってくれる、丁寧さ、的確さ、わかりやすさ、公正な態度、足りない点の指摘」など、チームとして一緒に関わってくれと市民に受け止められた職員の態度や説明内容である。低評価の理由としては、「区をまたがる場合に職員の話合いがなかった」や「担当者が替わり、十分な支援が得られなかった」、「職員が多忙で打ち合わせの日程が組みにくい」、「職員から提案実現の困

³ 第2章において、%表示しているものは、複数回答による。

難さを指摘されたが、なぜかという点で納得のいく説明が得られなかった」などコミュニケーションの不足や行き違いが挙げられている。

(3) 企画提案会前の職員による「学級」についての説明

多い順に、予算に関するもの、「学級」の運営の進め方と方法、「学級」の実施回数、提案書の書き方、市民と職員の役割分担についてとなっている。その他、実施報告や講師依頼の仕方等であった。なお、事前説明でもっと詳しく説明を受けたほうが良かった点として、運営委員や参加者の募集の仕方、先々の予定に対しての準備、書類の作成方法などが挙げられた。一方、新規企画者の「ゼロからはじめたのでその都度丁寧にしてもらった」と、分からないとの訴えに対して行き届いた説明があったとの回答もあった。

3 企画提案会段階

「みんなが活発に協議できる雰囲気」と「みんなが自由に発言できる雰囲気」を合わせると68%余であり、一方で「一部の市民だけが話を進める雰囲気」は皆無であることから、おおむね良好な雰囲気で行われていたと言える。ただ、「分からないことは言えない雰囲気」と回答したところも9グループあり、またその他の回答で、「サークルの企画提案意図が必ずしも『学級』の趣旨に合致しないものもある」「提案者は自分の提案で頭がいっぱい。慣れた人でないと他の提案について発言は難しい」、「初めてだったので、思うように協議に参加し自分の思いを伝えるのが難しかった」などの意見が出されていた。公共的・公益的なテーマへの意識についても1グループを除いて、意識したと回答しており、公共性・を意識した話し合いになっていることが伺える。

4 共同企画者、参加者募集段階

(1) 共同企画者の募集

半数以下の13グループが新規の募集を行った。募集の際、10グループが「不安があった」と答えている。逆に、不安がなかった理由としては「学習テーマ、企画意図を明確にしておけば誰が参加しても問題はない」や「志を同じくする方が居るだろうとの確信」との回答があった。経験者は、自信をもっているようである。

(2) 参加者募集にあたって

不安は上記より多く、四分の三以上の22グループが「あった」と回答している。過去の実績をもつ企画者はある程度の見通しを持っているものの、新しいテーマ企画では「多くの市民に参加してもらいたいが、実際に参加してくれるだろうか」「広報の効果の心配」という不安が挙げられている。

(3) 共同企画者や参加者の募集方法

実施方法の多い順に、市民館だより（86.2%）、チラシ（82.8%）、友人・知人（62.1%）、市政だより（37.9%）、HP（10.3%）。その他、市民館だよりとチラシを利用し口コミ、市民館の掲示板、対象者のいる施設への直接配布、タウン紙やボランティア紙などが挙げられた。「口コミが最も有効」との意見もあった。

(4) 共同企画者や参加者募集の際の市民館職員によるサポート

回答のあった29グループのうち27グループがサポートを受けたと回答し、その内容は、チラシの作成と印刷・配布・受付・連絡など事務的なサポートが主であった。ただ、グループの状況等によって、チラシの作成からであったり、印刷の作業のみであったりと、職員関与のタイミング・内容に違いが見られる。

5 市民自主学級の企画段階

(1) 職員からの支援の有無について

回答のあった29グループのうち27グループが職員から支援を受けたと回答している。具体的には、会場の確保や手配・名札の準備・名簿作成・印刷などの事務的な支援がもっとも多かった。しかし、企画会議での助言や企画のアドバイス、講師の紹介や連絡といった内容に関わる支援、さらには講座の持ち方や企画運営委員が自由な雰囲気です話あえるような方法の支援まで、多岐にわたっている。また「講座の持ち方、参加者が主体性を持てるようになる方法のポイント等、社会教育専門家としての知識を存分に教えてくれた」といった回答も見られた。

(2) 希望する市民館の職員からの支援内容

最も多いのが「関連する情報」の提供(58.9%)で、続いて「進行の技術」(41.4%)、「企画内容・企画の立て方」と「講師紹介」(いずれも34.5%)、「予算の使い方」(17.2%)となっている。その他、「他館で同じような活動をしているグループへの紹介」、「市の各サイトへのリンク」が要望として出されていた。

(3) 子どもの地域行事への参加促進

回答のあった29グループのうち14グループが工夫をしたと答えている。具体的には、学校やPTAへの協力の要請、親子を対象とした企画で、近隣の参加者に仲良しになってもらう、子どもたちの目線で常に考える、学校や幼稚園が休みのときの受け入れや異年齢の遊び場運営、学習プログラムへの実習や体験の導入などであった。

6 市民館職員との意思疎通、連絡方法

方法として特に多かったのが、直接に会う(96.6%)、電話(93.1%)であった。また、意思疎通・相互連絡は十分だったかどうかの評価については、「あまり良くなかった」を選んだのが回答のあった29グループのうち3グループあったが、「非常に良かった」が19グループ、「やや良かった」が7グループと概ね良好だったことが伺える。「あまり良くなかった」理由としては、職員の異動があった場合の引き継ぎの問題や余裕のない間際の連絡、担当職員が忙しすぎるため打合せの日程がうまく組めない、学級開催時間中に職員の参加がなかった、などの回答がある。ただ、「人による。会って意図をよく伝えるようにした」のように、機会を重ねるに従って、市民も職員の事情を察し、不満を抱くだけでなく自ら努力し、関係が改善される傾向が見られた。

7 市民自主学級の運営

(1) 「学級」運営途中での困ったことやトラブルの発生とその対応

「学級」運営途中でトラブルがあったと回答したのは9グループで、「子どもが病気になった」、「講師が忘れていた」といったアクシデントのほか、「企画委員の勝手な発言」、「参加者と企画者の一部に感情的な行き違いが生じた」、「学習形態を講義方式にするかディスカッションに主力に置くかなど」の見解の相違などであった。こうしたトラブルの解決法については、トラブルがあったと回答した9グループのうち、「市民だけで解決した」が4件、「職員に相談した」が4件で同数である。その際の職員の関わり方については、「メンバーに、以前から発言や行動に問題のある(会議で決めたこと以外の発言など)人がいることを前もって知らせてくれ、また配慮もしてもらった」、「職員に参加者の気持ちを聞いてもらう機会があり、その後のフォローができた」など、トラブルへの対応を速やかに伝授してくれたことや、市民の間に入って調整してくれたことに対する評価が高かった。

(2) 「学級」運営を通じた他の企画者や参加者と信頼関係の構築

作ることができたと回答したのは27グループにのぼり、全体により結果がでたことがうかがえる。

(3) 市民館職員との信頼関係の構築

作ることができたと回答したグループが多い(26)が、できなかったグループも2つあった。その理由は、「学級にほとんど参加してもらえなかった」、「関わりがなかった」で、職員の関与の無さに起因しており、意思疎通の欠如が主たる要因と思われる。

(4) 運営中の新たな人材の発掘と育成への工夫

19グループが工夫をしたと回答した。具体的には、「毎回、学級終了後に個別に活動の意義などを説明した」、「講座が終る時に協力をしてくれる人の参加を呼びかけた、会の運営に積極的に意見を出

してもらった」**「サークルの立ち上げに協力した」**、「次回の企画をしてくれそうな人に声をかけた」など、思いを伝えること、一緒に話す機会を持つ、こまめに声をかけたり、積極的な参加を呼びかけたりするといった工夫が共通して見られた。

(5) 新たな人材の発掘や育成への市民館職員の関わり

「企画への想いに共感していただき、事ある毎に私たちの思いを参加者へ伝えてくれた」**「一緒に参加者へ話をしてくれた」**、「問い合わせなど関心がありそうな人をつないでくれた」にみられるように、一緒にフォローした職員がいた。その一方で**「関わりはなかった」**、「関わってくれないものと思って自分たちだけでやった」といった事例もみられた

8 市民自主学級の企画・運営を終えて

(1) 企画者にとって良かったこと、良くなかったこと

「仲間が増えた」(96.6%)、「知識が増えた」「顔見知りの職員ができた」(共に75.9%)、「他の地域活動に関心・興味が増した」(65.5%)、「地域のことがよくわかるようになった」(51.7%)などに対して、「時間がつぶせた」といった消極的な回答は無く、全体として積極的な効果が出ていることがわかる。「地域の課題を深く考えるようになった」「やってみて想いの実現が困難なこともわかった」「有効な企画の仕方がある程度分かった」「地域の人との交流がとても楽しかった」「一番やりたかったことは何かを発見した」など、「学級」の企画運営を経験したことでの気づきを語っている。

逆に良くなかったこととしては、「時間をとられた」「地域のことが思ったほど分からなかった」「他の地域活動への興味関心が広がらなかった」「出費がかさんだ」「人間関係がわずらわしかった」などの回答が若干見られた。なお、その他としては、子どもへのしわ寄せや自分の仕事との調整の大変さなどが挙げられていた。

(2) 今後の「学級」企画への希望・要望

最も多かったのが「新しい参加者が増えたほうが良い」(69.6%)で、「他のグループと連携してネットワークを拡げたい」(48.3%)、「参加者が多いほうが良い」(37.9%)、「予算がもっと欲しい」(31.0%)、「職員の関与をもっと増やして欲しい」(13.8%)などが続いている。またその他の意見として、区をまたがった企画や市全体での企画、行政との役割分担の見直しによる負担の軽減、場所の確保などに関する要望が出されており、特に子育て関連の企画では子どもの保育への充実が多く出されていた。

(3) 参加者が次年度の共同企画者や他の企画提案者となった事例の有無

29グループ中、「あった」と回答したのは、19グループで、内5人以上が10グループ、10

人というグループも3つあった。このように半数以上のグループが前年度の参加者が企画委員等になっているという循環の視点からも、この事業が積極的な地域参加や主体的学習活動の展開において大きな役割を果たしていることが見てとれる。ただ、「なかった」というグループも8つあることから、一層の対応が求められる。

9 全体的な特徴

(1) 市民館担当職員から受けたサポートで、良かったこと、良くなかったこと

良かったことを記入したのは29グループ中23グループ、一方、良くなかったことを記入したのは29グループ中13グループである。前者の場合、具体的な事務の支援はもとより、「市民に足りない知識や情報のアドバイス」、「社会教育の専門家としての助言」、「困ったときの相談相手」、「個人ではなしえない市民館に蓄積されたノウハウ」などは評価が高い。反対に、「企画会議に関わってもらえなかったこと」や「ほとんど関わりがなかったので自分達の学級に関心がないのかなと思った」などといった意見からは、職員の関わりに対する市民の要望の大きさが伝わってくる。

(2) 「学級」をきっかけとした他のグループ等との交流

29グループ中、「なかった」が15グループ、「あった」が12グループであり、他のグループとの交流促進が今後の課題であるといえよう。また交流のきっかけは、「相互参加」、「職員からの呼びかけ」、「企画提案会や交流会で顔見知りになった」、「活動の問い合わせ」などに加え、「講師役をお願いしたこと」などであった。

(3) 「学級」が地域へ拡がり地域貢献への契機となったか

「きっかけになった」との回答が7割以上で、この事業の目的が効果を挙げていることが見てとれる。「地域のグループにボランティアで協力していきたい」、「ご近所でのつながり作り」など同じ目的の活動グループとのネットワーク化や「市民による市民自治推進の委員会等へ参加したい」など活動の深化がうかがえる。

今後は、すべての「学級」がそうしたきっかけになるよう、一層の行政支援のあり方が期待される。

(4) ノウハウや情報交換の場の必要性

29グループ中27グループが必要だと答え、ノウハウや情報交換の場を求めている。具体的には「ふりかえりの時間を持ち、グループの課題をいろいろな立場、経験のちがいの中で問題解決していく場」、「日常的に自由に交流できるフリースペースのような場」、「単なる報告会でなく時々集まってゆっくり話をしたり、情報交換したりできる場」などが要望された。

(5) ノウハウや情報の交換に必要な行政支援

最も多かったのは、機会・場所の提供、ネットワーク化を促進するためのコーディネーターとしての役割、他区や全市の情報提供への要望であった。「コミュニティセンターのような場所、子どもと一緒に話し合いのできる場所」、「同じ活動をしているグループ間のまとめ役、テーマ別の全市の交流のプロデュース」、「他の市民館の企画の情報、他のグループの企画責任者の紹介」などが挙がった。

10 企画・運営の仕組みの改善案

以下の改善要望が出されたが、仕組み全体に関わるが多く、また子育て中の人たちからは、「子どもと一緒に参加すること」が大きな問題となっていることが分かる。

「子育て学級を母親自身が企画運営することは非常に負担が大きい。子連れでは相談する時間・場所が限られる。子連れであること自体がストレスになり、市民館の強力な支援が必要。保育にもっと予算が付くと良い。」

「毎年同じような企画が多い。企画提案会では、提案数が少なければ社会性が感じられなくてもNOといえない雰囲気がある。それぞれの企画の成果報告を公開して欲しい。」

「『学級』の開催が秋から集中し、『学級』以外でも似たような企画がいろいろあると参加者も分散する。春・秋開始の2期制も考え、年間に万遍なく開催できるようにして欲しい。」

「もっと、『学級』全体のPRを。」

「継続性は大切。もっと、長期・継続発展できるようにして欲しい。」

「お疲れ様程度の心遣いができる予算が欲しい。もっと、全体の予算アップを。」

「職員の異動時の引継ぎを館としてきちんと行って欲しい。」

「学級間の交流、協働が始まるような仕掛けをして欲しい。」

第3章 企画者からの聴き取りによる市民意識実態の概要

フィールドワークでの聴き取り(調査方法については5ページ参照)は、学級開設途中ではあったが、過去実施企画者のアンケート結果と同様な反応が多く見られた。以下、特徴的な事柄を記述する。

1 企画提案会に向けての取り組み

(1) 「学級」の趣旨や年間の流れや仕組み等についての広報

もともと市民館に出入りしている人が多いので、職員や既設の学級・事業からの情報によって「学級」の趣旨を認知している人が多い。特に子育て関連の「学級」の企画者は既に何かしらの館との接点を持っている場合が多い。

(2) 企画提案会前に職員から「学級」について説明があった項目

事前説明について

「南部」地域の館では、企画提案者が少ない傾向があることもあってか、館を挙げての取り組みが感じられ、館長や担当職員以外の職員からも説明があり「後押しされているよう」と受け取っている。ただ、新規の企画者からは、一通りの趣旨説明では具体的な事柄と一致せず分かりにくく、経験者にとっても、「過去の取り組み事例を例示しながら説明してもらおうと安心」との声があった。このことは、過去企画者のアンケート結果とも一致する。

役割分担の説明について

初心者と既に「学級」の趣旨が分かっている市民とでは理解の仕方に差があるものの、実際に職員との役割分担が出来ているかどうかは、個人やグループの状況により異なる。いずれにしても、「作業の都度説明があった。」「印刷はどこまで誰がするのか?」との声にあるように、具体的な作業などを提示しながら、趣旨と絡めて役割分担の説明をするほうが分かりやすいようだ。更に、どちらのケースも「職員の力を借りなければできない」と語っている。一方、「担当職員によって、温度差があるようだ。市民館は協働ということをどう理解しているのか、安上がり行政にならないように」という指摘もあった。

(3) 提案書の作成・提出時の状況

経験者であっても、職員にアドバイスをもらったり情報交換をしたりしており、一様に職員の見守りに安心感を抱いている。特に顔なじみの場合は気軽に聞けるようだ。

提案書を職員にチェックしてもらうことにより、「最初は学習サークルという思いだったが、地域のことでも取り入れる視点が必要との助言があった。」「継続の場合、どう成長しているかが大事という職員からの指摘があった」など、「学級」への理解を深めることにつながったと考えられる発言もあ

り、この段階での職員の関与の影響は大きい。企画を通すためにどうしたらいいのか、単に長期を短期にするとかでなく、より良い提案になるための職員からの助言は感謝されている。

聞き取りをした中に、外国籍市民の企画者がいたが「日本語が上手でなかったので、わかりにくかった。自分でやってくださいと言われても、どこまでできるのか」と、言葉の壁が不安を増長させている例がみられた。

2 企画提案会段階

(1) 企画提案会の課題・意義

毎年の企画提案会のやり方や基準が変わることへの戸惑いがみられる。グループによって、「学級」の趣旨への理解度に関きがあることへの疑問も出された。例年提案グループが多くても、予算が増えないことへの苦情も寄せられた。

一方、「他のグループとつながりができ、講師として参加した」との発言のように、企画提案会が他のグループの情報を入手する場にもなっている実例があった。

(2) 企画提案会での企画選考への意見？

子育て関連の「学級」の企画者からは、「本来行政がやる企画」「地元での子育て企画は少ないので必要」など企画の意義を訴える発言が多いが、「継続企画の場合、内容を深めていく必要があり評価が厳しい」など、子どもの成長により参加者が入れ替わることへの理解を求める発言も出ている。

「新しい企画や市民をとというのは分かるが、新しくなければというのはおかしい。市民に本当に必要な講座とはどんなものか、単に幅広い世代が集まって楽しめればいいのかというのはいけない」等、継続企画に対して単に年数による上限を設けることや、提案された企画を全部採用とするため、長期の「学級」を希望していたのを短期へ変更してもらおうような調整に対しての疑問も出された。

3 共同企画者の募集段階

個人提案による場合は、共同企画者を応募しなければならず、一緒に企画してくれる人が集まってくるのかへの不安が大きい。市政だより等での公募の他に、実際には職員からの声掛けや友人の勧誘など個人的なつながりによるものも少なくない。

4 職員との関係

(1) 職員からのサポートへの評価

会場の確保はもちろんのこと、トラブルへの迅速な対応処理、事務手続き、講師紹介・交渉のサポート、講座の進め方、更には人脈や活動のネットワークに関する情報提供など「一緒に考えてもらって

いる」といったサポートに感謝している。

「何をどうするのか決めるのは自分たちですることと思っているが、困ったときや一歩前に進めたいときに、どこに相談したらいいか情報を提供してくれたり、つなぎ役になってくれたりするのは助かる」のように、特に講座プログラムを組む際の企画の改善案や講師の斡旋などについては職員のサポートは大きな役割を担っている。

また、町会に入っていないような人など、市民館を利用していない市民にも広く周知してもらえそうな広報手段や広報の場の設定、予算内でも呼ぶことが可能な講師のリストや、関連するグループの情報提供などが要望として出された。

更に、「学級」で学んでいる段階から、自立できるようになるまでには場所・時間・お金が必要との指摘もあった。

「スキル」を持つことより、何が必要かのノウハウ<Know How>に気付き、その能力を持った人とつながるノウフー<Know Who>が大切であり、それを得るための支援が欲しいとの意見も出ていた。

(2) 職員との意思疎通

職員も市民も多忙であり、通常の意味疎通の手段として、電話・メール・FAXなどが頻繁に利用される傾向があるが、「込み入ったことは面談で」「普段から会話をしながらいろいろな職員と情報交換している」と場合によって意思疎通の手段を使い分けている。

担当職員が誰かによっても、市民の対応が分かれているようで、「担当者が新人なのでこちらも配慮している」、「担当者が変わったときに引継ぎがうまく行われているか不安」などの発言があった。

(3) トラブルの発生とその対応

予算面での不安、土壇場でキャンセルした参加者の立替払い保険料の回収など、市民が言いだしにくいことなどを職員に相談している。

企画者が外国籍市民の例において、言葉の壁が職員との意思疎通を妨げたきらいがあったようだ。両者の間に入った友人の日本人企画者から、負担を感じたとの声があった。

また、現地見学の際に事前連絡をせず、現地で問題になった事例があったが、運営に慣れていない市民の気付かない点について、事前に職員のチェックが欲しかったと市民は感じている。

初めて寄り集まった皆がそれぞれの思いをぶつけ合っている時など、どうまとめるかを職員に相談したい場面もあったようだ。

5 企画者と参加者のつながり

子育て企画は、子どもが介在しているので、同世代の市民同士のつながりが生まれやすい。親自身が楽に参加できるためにも、保育が大切であるとの指摘があった。

一方、大人だけの企画の場合は、まず、仲良くなるためのゲームや共同体験を盛り込むなど工夫をし

ているが、その提案も職員からのアドバイスであることが多いようだ。

6 その他

(1) ノウハウや情報交換の場の必要性

情報交換会や、他区や区内での同様な企画を立てる人との交流が、一様に望まれており、「いつでも、自由に集まることが出来る場が欲しい」との発言が見られた。また、「初めての場合は自分の企画のことで精一杯」の発言のように、市民館がもっと積極的にコーディネートしてほしいとの要望が出された。

(2) 自分自身にとって良かったこと

「知り合いが増えた、ちょっとずつ地域活動に参加し始めた、知的好奇心が刺激された」など進む方向が見えた人が多く、この事業への参加を肯定的に評価している。

(3) 改善して欲しい点

子ども関連企画からは、毎年継続を希望する声が多かった。

第4章 職員の意識実態（職員へのグループ・インタビューより）

1 各市民館での市民の参加に関する全体的傾向

企画提案本数、サポートを必要とする市民の考え方、市民の自主性などにより地域差がみられる。市南部はもともと地縁が強く、行政に頼る傾向があり、提案数が少ない。それに対して市北部は、新住民が積極的で自主的な傾向があり、提案本数も市南部より多い傾向にある。市民の経験や地域性によっても、実際に職員の関わり方が違ってくるため、原則を守りながら職員がどう対応するかが問われてくる。提案者が初心者か経験者かによって職員が注力する場面も異なっており、職員の関わり方は非常に個別的、可変的である。

2 企画書作成の段階

(1) 全市的状况

全ての館において職員は新規の企画が市民から出てくことに心を砕いている。特に企画数が少ない館では、市民館に来ている市民の潜在的な興味や意欲をいかに引き出すかが課題である。市民ニーズの掘り起こしには、他の開設学級(平和・人権学習など)での雑談の中から市民の声を拾うことが有効であるとの意見も職員から聴かれたが、現実にはなかなか時間的余裕がなかったり、職員の意識の足並みが揃っていなかったりするなどの問題も明らかにされた。また市民館によく来ている市民には「学級」の趣旨が浸透し始めているが、そうではない市民にはまだ広がっていないという認識は全館の職員に共通である。

市南部では、市民館に日常的に出入りしているグループや個人に提案者が限定される傾向があり、提案が出尽くした感がある。そのため、新しい市民の持つ潜在的な学習への興味などの掘り起こしが必要になっており、広報から企画提案会までの期間を長くとったり、通常の学習相談で新たな人材を掘り起こしたりなどの対応策を講じている。

市北部では、企画提案会の資料を取りにくる市民は多いものの、新規の提案数が実際どのくらい出てくるかの予測が事前には立たない場合が多いようだ。実施可能な「学級」数より提案希望が多い場合は、職員がやってみてはどうかと声掛けしても企画提案会で落ちてしまう可能性もあるので、なかなか声が掛けづらい。また継続のグループには来年の意向は聞けるが、新規は提案が出揃って初めて分かるという状況である。

(2) 取り組みの拡がり

そのような中でも、「平和人権の学級に参加していた人に案内したら、多文化共生の『学級』ができた」、「今年6つの『学級』のうち3つは、前年度の『学級』の参加者が企画提案したものであり、提案者の拡がりを感じる」等の意見もあり、取り組みの拡がりを感じられた。

(3) 職員の対応の課題

一方、職員も「学級に早く来た人と雑談するなど、できるだけ市民と話すようにしている」、「雑談を通じて、それとなく来年の案内をしている」といった工夫をしたり、「学級」への相談や他の学級の時など一年を通して、その人がどんな興味があるのかりサーチするよう部下に指導している」等の努力をしている。いずれにしても、職員が市民の興味や意欲を引き出すために時間を作る意識が必要であることがポイントとなっているようだ。

(4) 時間的問題

手続きの際の時間的な問題も出されており、「提案締め切りから企画提案会まで時間がない。個人の希望と「学級」の趣旨とをマッチさせる調整がもっと丁寧にできればよいのだが、なかなかできない」、「提案期間は長くても、市民の提出は締め切り間際のギリギリになることが多いので、丁寧な話し合いが出来る時間は少ない」という意見も聞かれた。その一方、「12月に広報を出すから企画提案会までの時間が取れる。提案書を作るのは2月だが、相談を受けるのは12月からと前倒しにしている」というところもあり、限られたスケジュールの中でいかに工夫するかが課題となっている。

3 企画募集段階

説明事項の統一を図るため、「学級」の担当者会議で検討したものを配布しているが、企画提案会や企画委員募集、一般参加者募集のステップ毎にいていねいな説明が必要であり、企画提案会前には、前年度のモデルを提示するなどの工夫が必要であるという意見も出ていた。

4 企画提案会段階

(1) 運営上の問題や課題について

企画提案会は市民同士の合議の場と位置づけ、合意が得られない場合には館の運営審議会委員等や館長による協議で調整案を作っている。市民同士による合議を前提として、各館それぞれの実情に合わせ企画提案会の開催方法を模索している。市民とともに、企画提案会までに企画そのものを「学級」の趣旨に合った形にしていけるか、企画提案会での協議それ自体を通じた市民の育ちをいかに支援するか苦慮しているようである。

(以下発言)

「市民同士の話し合いで決まらない場合は、議論の内容をもとに、館長や館の運営審議会委員等で調整案を作り、再度企画提案会に諮るなどするようにしている。」

「企画提案会は市民の自治形成の学びの場、地域にとって必要な提案だと市民自身が学ぶ場であって、予算を取り合うためではなく、わかり合うために質問タイムを設けている。」

「提案数が多い場合、2時間半では、時間的に厳しいこともあるが、予算の関係で長期の企画から短期の企画に移ってもらうなど、互いに譲り合って折り合いをつけるように調整している。」

「企画提案会までに市民から不明な点や要望を聞き、他の事業への斡旋や他のグループとネットワークして1本化するなどの調整をするのが理想だが、そこまでのフォローができない。」

「企画提案会できちんとした提案ができるまで、市民が力をつけてもらえるように、サポートしなければならない。」

「市民館職員はあくまで調整役でその場での発言権はなく、基本的には市民同士の合意形成によって提案を受け入れるが、客観的な指標を明確にすることも必要。企画は短期、長期のどちらがふさわしいのかの指標や地域の課題について市民がどう思っているのかなど。」

(2) 3年を超えた「学級」への対応

「学級」は原則として3年間を企画の継続上限にしているが、3年を超える「学級」への対応も課題となっている。新企画の発掘や広く市民への参加機会を提供することと、継続グループの更なる自立の視点の狭間で、自立に向けての働きかけやシステム作りが必要であるという認識が多く出された。

(以下発言)

「職員の中では、3年を超えている企画は自立してやらしてもらおうとか、他の事業・学級へ関わってもらおうと話しているし、調整もしている。」

「3年を超えた企画に関しては、継続の必要性や意義などを十分に考えてもらいたいですが、残念ながら、企画提案会ではその機能は果たせていない。お互いの批判はしないで、折り合いをつける傾向にある。市民館は企画提案数を増やすことが活性化につながると思っている。」

「3年以上の企画者には、少しずつ自立してもらえるように提案しているが、『学級』の場合は会場も取れるし委託予算も付いているのに対し、自立すると自主グループ講師派遣事業しか支援する仕組みがない。その中間の支援の仕組みがあると緩やかに次のステップに踏み出せる。」

5 企画委員会・学級運営段階

企画提案会を経て企画委員会へと至る流れの中で、個人提案から、企画委員を募集し、企画委員会を設立するまでにいかにもっていくかが大きな問題となっている。

(以下発言)

「区内のいろいろな課題についての提案は企画提案会を通りやすいものの、個人のニーズとなかなか合致せず、企画委員が集まらないことがある。一方で、個人の興味ある内容が、地域の課題と結びつかないこともあり、それらをどう調整するかが課題。」

「地域の課題は範囲が広く、どんな企画でも広い意味では地域の課題になってしまう。」

「個人提案から企画委員会までもっていくのが大変。多文化共生、環境問題、世代間交流などは課題として重要だが、広報だけではなかなか人が集まらないため、人脈を駆使することになる。そもそも、企画提案会では、企画を通した後のことまで考えていないのが問題。目的・ねらいが明確で広い意味の地域課題であっても、果たして参加者が集まるほど公的な課題かどうか。」

「市民と職員の協働とはどんなことを指すのかも大きな問題となっている。職員は、企画委員会には、印刷だけ等の場合を別にすれば、ほぼ参加している。しかし、グループによっては、自分たちで相談して結果だけを職員に報告するところもある。市民の成熟度があると判断して済むのか？結果をもらうのではなく、中身を一緒に決めるプロセスこそが、協働なのではないか？」

「職員がどこまで関わるか難しい。グループの主体性を尊重しながら、企画委員と職員がどう協働するか？」

「職員にできることは、市民が知らないことの質問に答えたり、相談にのることなのか。」

「企画提案会の前にこの事業の趣旨を説明し、分かってもらっていた筈なのに、一度企画が通ったら、補助金をもらっているだけという意識のグループもある。いろいろ制約があると言うと、なんでゴチャゴチャ言うのかといわれる。」

「どこまで、職員が関わるか？」が難しいのは、職員側の市民の力量の見極めの難しさに起因している。市民と職員のコミュニケーションがよく取れている中で、お互いができることを自然な形でやれば、一番良い。グループや個人提案者の力量を見ながら、リードするのか、フォローするのか、職員の対応は、両方ある。」

「相手に寄り添うのは、自分でやるより難しい。」

「市南部では、職員が全部やってくださいで、市北部では、なんで職員が口をだすの？という市民の反応が見られる。」

「行政への依存度が高まるといけないので、なるべく市民の自主性を尊重するようにしている。職員の考える市民の育て方と市民の気持ちにズレがある。」

「見守りながら、引き出していくことの日々試行錯誤。」

「協働は企画者と職員もそうだが、企画委員と参加者の市民との協働もある。市民同士の協働をどう作るかは、プログラムをどう作るかにかかっているが、そのときに職員の専門性が発揮されるのではないか？」

「企画提案会には、個人か、代表者しか来ないし、その時には企画提案会のことしか頭にないが、企画委員会ができたなら、その時にも、企画者全員に再度協働の趣旨などの説明が必要。」

いうまでもなく、これらは職員の関わり方に直結している。市民の主体性を尊重しながら、企画委員と職員がどう協働するか、グループや個人提案者の力量をみながら、リードするのか、フォローするのか、「協働」とは具体的にどんなことを指すのか、職員の力量が最も問われるところである。

6 市民自主学級の仕組みについての評価

10点満点で現在の仕組みについて評価したところ、7点が3館（川崎、幸、中原）、6点が4館（高津、宮前、多摩、麻生）となった。その際の評価のポイントは以下の通りである。

(1) 良いと評価した際のポイント

- ・うけたまわり学習でなく、自主的に考え学び判断する手法である。
- ・市民自治を目指している理念がある。
- ・市民の学びのステージとなっている。
- ・市民の思いを学級という形にすることができる。
- ・職員だけでは考えられない発想や企画となっている。
- ・以前は、市民館に来る個人としかつながることができなかったが、「学級」をすることにより、そのグループやグループの活動と市民館が関係をもつことが出来るようになった。

(2) 良くないと評価した際のポイント

- ・参加がまだ一部の市民に限られている。
- ・この事業そのものが市民館に来る人達だけの認知にとどまっており、一般の市民への広報が行き届いていない。
- ・この事業の趣旨が十分に市民に伝わっていない。
- ・職員が各ステージで市民とのコミュニケーションが十分にとれていない。
- ・4～5年目のグループが今後どうするのか。新規参入の道をどう開いていくのか。有効な道筋が見えていない。
- ・企画グループにとっても、参加者にとっても、この「学級」を終えた後のビジョンが見えない。
- ・市民館全体の日常の仕事の中で、この事業が他の事業や学習相談などと有機的なシステムになっていない。

以上のようなポイントは、事業を評価する上で有効であると思われるが、評価する側の主観や恣意によって左右されやすいと考えられるため、「学級」についてより客観的に評価できるよう具体的な指標を検討していく必要があると言える。例えば、学びのステージとは具体的にどのような状態を指すのか、この事業と他の事業との有機的連携の有無をどのような事柄で判断するか、などである。

7 職員の課題意識をまとめてみると

職員から、今後の課題として出された意見は、大略、次の4点にまとめることができる。

第一は、既に自立しているグループのメンバーが「学級」の提案をしてきた場合の対応の仕方について

てである。この事業が始まったときは比較的小さいグループや個人しか想定していなかったため、自立したグループへの対応をどう考えるかはこれからの課題となっている。その際の考え方の基本は、そのグループの宣伝や勧誘ではなく、あくまでも学習事業として位置づけるということである。そのためには企画委員会もそのグループのメンバーで構成するのではなく、開かれたものにしてもらうということ。そして広報で趣旨の周知の徹底を図ることが必要であるという意見が出されていた。

第二は、出口をどうするかということで、「学級」の自立をどう促進させるかという課題である。現実には、支援内容が少なくなるため、例えば会場使用料の軽減や自主的運営に向けての日常的なサポート体制の整備が必要であり、今後行政内部でも協議が必要であるというものである。

第三は、職員の力量や協働への意欲を育てる方法についての課題であり、「相手の市民も初めての場合は型通りにいかない。そのつど試行錯誤」、「この事業も突き詰めれば、人と人の付き合い。それぞれ異なる性質・性格を持つ中で、どうしていくかは、永遠の課題」、「職員は仕事なのだから、ある程度の距離が必要。職員がのめりこんでいる時はセーブするように言う。職員個人によって本当に違う。難しいが、だからこそおもしろい」等の意見が出されていた。

第四は、全市の施策としての一定の標準化の是非をめぐる課題である。例えば、毎年新規企画が3割を超えることを努力基準にすることや、継続の場合も提案者や企画者が変化していることなど、流動性を一つの評価基準にすることも考えられなくはない。しかし、どの館にでも同じ基準を設けることについては「一定の目標に向かう努力はするが、地域差もあり対応には差がある。」、「今は浸透の段階。次の段階で拡がりが出てこないといけない。地域差がある現状では、この制度の成熟が深まってからでないと、難しい」といった意見が多かった。

第5章 市民と職員の意識実態への考察

前述の第2章・第3章での市民企画者の意識実態と第4章職員の意識実態を照らし合わせ、双方の認識・意識の合致及び相違点を分析する。

「学級」開設の企画者の主旨や意図については、市民の自発性に任されているため、さまざまな企画が登場しており、職員からは、職員だけでは出ない発想や問題意識があると評価されている。その中で、子ども関連企画の企画者の多くが、「学級」の社会的使命感を強く持っているのが、特徴的である。先輩市民の子育て支援・子育て中の同世代交流など以前に市民館が実施していた乳幼児学級(平成15年度まで実施)の趣旨を引き継いでいる認識が強いいため、職員からの支援への市民要望(後述)は、職員が感じているよりも大きい。

企画提案会までの取り組みで、職員の心配事はどれだけの提案数が揃うかに集中している。そのため、事業説明や提案内容の相談の取り組みには、各館共に力を入れているが、地域によっては広報の時期を早めたり、前年度の実事例を例示するなど広報の仕方を工夫したり、相談会を設けたりしているところもある。これら館の熱心な取り組み態度は、企画提案者から「理解してくれ親身になってくれる」と高評価である。しかしながら、初めての個人提案者は、経験がないため、受けた説明(事業の趣旨や年間の流れ・内容)が具体的にどんなことを指しているのかが、分かりにくいようである。個人の想いを形にするために、通年、各場面でのきめ細かな説明が望まれ、職員はいかに意識的にそのための時間をとるかが課題となろう。また、事業説明内容で市民が最も気になるのは、自分の企画が事業趣旨にあっているかという点であった。後の企画提案会や協働企画者募集の場面で問題となる「地域課題に合った公的な視点」の捉え方について、職員と市民との合意形成が必要である。

企画提案会は、プレゼンテーションの仕方・合意形成の仕方など市民協議による学びの場となっており、職員は提案された企画が出来るだけ実施されるための調整役として機能している。ただ、提案に対する審査基準が必ずしも明快ではないため、市民は他の企画に対して意見が述べにくく、そのことが後の共同企画者募集の大きな弊害になっている点を「公益性についての捉え方が市民と異なっている」と職員は指摘している。

グループによっての状況が様でないため、企画提案会の審査基準について原則論的な基準を設定するか、モデル企画事例を提示するなどの工夫が必要であることが市民・職員双方から指摘されている。

個人提案の場合、企画提案会后、企画委員を5人以上集めて企画会議が成立するまでにいかにもっていくかが市民・職員共に大きな問題となっている。職員が気につけ、また負担にもなっているのは、

個人提案者の共同企画委員探しである。提案した市民自身だけでは、共同企画者を募る人脈のない場合があり、職員による声掛けは感謝されている。しかし、市民個人の思いだけでは解決できず、「学級」が成立しない場合もある。このことは先述の「公共ニーズ」の捉え方と関連しているが、『川崎市教育文化会館・市民館市民自主学級開設要綱』⁴にある「地域や社会の課題解決」のために、提案者が必要と考える学習が、少なくとも5名の共感を得られるようにするための工夫にも再考の余地がある。

同企画者や学級の参加者の募集の方法について、市民館利用者以外の市民に向けてもっと効率よい広報の方法はないかとの悩みは企画グループ・職員ともに深い。市民からは、「学級」の募集・実施時期を分散する提案もされている。実施分散の提案は、この事業そのものをどう活性化させるかにつながるもので、現在、職員間では担当者会議等でこの事業の時々課題を協議しているが、このような仕組みの運用に関する市民の評価や提案を、市民と一緒に考える機会が必要と判断される。

募集に際し、広報のチラシを作成するが、企画グループの事務処理スキルのレベルに合わせ全グループが職員からサポートを受けている。その職員のサポートは市民から大きな支援と歓迎されているが、職員からは「市民の苦手なスキル（特に事務処理）を担うことが行政としての役割なのか？それが協働か？という問題提起がある。市民の事務処理の技量の獲得が「学級」企画経験年数と必ずしも比例していない現実からは、いつまでも足りない技量をサポートしていると、市民は企画の中身を考えるだけで満足し、自立的な企画運営にはならないのではという懸念が出された。

企画内容・「学級」運営に関する職員からの支援の有無については、グループの経験が豊富になるに従って、職員に期待するサポート内容が変化している。事務処理のサポートから、講座の持ち方や運営スキル、更に社会教育的な見識・関連情報などへと求めるサポート内容が深くなっていく。地域内・他区・全市の活動に関する関連情報提供への要望は市民から強く出されているが、市民館にはそれらの情報の蓄積が少なく、市民との意識のズレがある。その中で講師リストの紹介については、市民館ならではのノウハウのサポートとして市民に認識されており、どのグループからも高評価である。

また、市民は学習を積むほどに職員へ社会教育職員としての力量を求めるようになっており、それがかなわない場合に不満を持つ。特に引継ぎの有無による職員の対応に関して、市民の評価は大きく変動する。職員個人がもつ力量を、いかに市民館職員全体の財産にしていくか、この事業・業務をどう職員の他の業務と関係付けるかが、職員からも課題として出されている。職員自身、この事業の趣旨と各段階の具体的な作業との関連性について学ぶ研修を受ける必要性は感じており、このことが引き継ぎ時のトラブル回避や、職員個人の個別な対応から共通の社会教育的な対応へとつながる手立てとなる。

⁴ <http://www.city.kawasaki.jp/outline/info1820/index.html>

市民館職員との意思疎通、相互連絡の方法について、現状では、市民・職員とも多忙で学級や企画会議の実施時間内で話をする程度で、事前の打ち合わせや相談などは電話・メールで済ませ、わざわざそのために会ってじっくり話す機会は少ない。いかに効率よく、かつ深い話し合いが双方で出来るかは、互いにどれだけ協働意識を持っているかに影響される。

「学級」運営途中での困ったことやトラブルへの対応については、市民と職員との間に、相談しやすい人間関係が形成されていることが鍵となる。特に、市民間のトラブルに関して、市民が相談できる機能を職員に求めており、この点については、職員が「学級」運営に継続的に関ってきた経験が豊富な場合、相談した市民の満足度も高い。

今後、以下の諸点に留意が必要であろう。

- ・ 市民・職員ともに企画内容の拡がり、グループのネットワーク化を望んでいる。
- ・ 企画委員の拡がり、この事業にとって大きな課題の一つである。「学級」参加者が次年度の企画者となる流動性の有無は評価基準となり得るが、地域によっては職員が新規の企画者の獲得に苦労するなど、地域ごとの課題がある。
- ・ 企画グループがお互いのノウハウや情報を交換する場が必要かどうかについては、市民から多くの指摘が挙がった。「どうやったら趣旨に合い、しかも楽しく企画内容が広く深くなるか」についての市民の学習意欲は大きいことが確認された。そのための本音の話し合いのできるフリースペースの設置や報告会のあり方への提案、更に職員へのコーディネーターとしての期待が出されている。
- ・ 子育て関連企画者は、社会的な使命感も感じているので企画の継続や子どもの保育など行政との協働についての要望が大きい。これらの市民との意見交換が必要であろう。
- ・ 企画グループの長期継続希望と、職員から見た実際の市民の育ち、また自立できる環境の整備や「学級」から次なる学び・実践の場の確保など、市民企画者と職員との見解の相違も多く考慮しなくてはならない視点が多いが、これらは今後の大きな課題となっている。
- ・ 既に自立した活動を行っているグループのメンバーが「学級」の提案をしてきた場合の対応の仕方については、市民と職員との間で企画の持ち方等への認識が異なっていた事例があった。これからの検討課題である。

第6章 キーワード視点からの提言

1 キーワード視点からの問題整理

これまでの調査、考察を踏まえて、本章では5つの提言キーワードに基づいて分析し、市内各地域の特性や意見を中心に課題を整理し、後半で提言を行う。

(1) 企画者の意図

市民企画者に対し、企画したきっかけや意図について質問したところ、それらは企画者ごとに多種多様であり、アンケート調査と同様に、地域差は感じられなかった。

(2) 市民の協働意識

南部地域については、全体としては市民館との関係は「垣根が低く気楽に相談できる」、「フレンドリーな感じで、様々な場面でサポートし、後押ししてくれる存在」という印象を持っているようであるが、北部地域では「良い子育てをしてもらいたいという思いを、若い人に聞いてほしい。それが資金付きで公の施設で出来るなら、参加者に安心感も与えるので、リスクが無く募集しやすい」「自分達はもう育っておりノウハウも持っている。自分たちの持つ能力を出せる場を求めた」等の意識をもつグループも見られ、地域による意識の違いを感じさせる事例も見られた。

その他、企画者と職員の意識に差異があった事例をいくつか紹介する。職員の側は市民の自主性を引き出そうと努力したが、市民の求めとの間に微妙な差があったり、企画者の希望やニーズと、自主的活動を促進したい職員の間ズレが見られたりする等、協働意識の醸成をどう図るかについて、配慮の必要性を感じる事例もあった。

別の「学級」では、公募をしたものの企画者が集まらず、職員が呼びかけをして企画グループが出来上がった。そのため会議の進行・資料作成などは職員が行ってくれるものと市民が了解してしまい、市民の自主的な運営への移行を願う職員の思いが十分には伝わっていない事例があった。

ある事例では、リーダーが強力な分、メンバーが自由な意見を言えない雰囲気があり、職員によるコーディネートや、まとめが必要と感じられる場面もあった。

ある「学級」企画者は、「『学級』の企画者としての段階から自立への中間支援が欲しい」と語っていた。

一方、目的が明確で、協調しながら自主的に自らの役割を自覚して活動している市民は、職員との関係も良好であり、役割分担も上手くいっている事例も若干見られた。この場合は地域差というよりも、「学級」企画者の意識・目的意識によるところが大きいと感じられた。

(3) 行政サポートへの視点

行政のサポートについては、「忙しい中本当に良くやってくれ、感謝している」等、好意的に受け

止められている事例が多い。

しかし、職員がどこまで関わってくれるのかが掴めず不安であったという声なども聞かれた。職員の異動があったら今のサポートが受けられなくなるのではとの不安も聞かれた。また、一連の契約手続きなど、初心者には難しい書類づくりも多い。この事務の煩雑さが自主企画の拡がりにネックとなっているとも言う。北部地域のある「学級」は、提案書作成や提出などに馴れており、行政からのサポートの必要性を感じていなかった。場や資金の提供や広報など行政を利用しているような姿勢が感じられたが、「お互いの意向を聞きながら市民館と協力する事を学んだ」とも語っていた。

また、「学級」の開設経過や年数によっても、意識に大きな差異が見られた。

その他、企画者と職員の意識に差異があった事例をいくつか紹介すると複数の区を通じて同様な取り組みをしているグループからは、他区の市民館職員の対応との比較が今回のサポートの仕方への不満として大きく影響していると思われる事例もあり、市民側の受け取り方と職員の個別な対応についても課題を感じた。

別の事例でも、企画グループは会議の進行や資料作製など職員がやってくれるものと思っていたのに、途中からやってくださいと言われたなど、職員と市民の意識の間に乖離が感じられた。

別の学級はチラシ作りの作業で議論がまとまりにくい状態になっていたが、職員はあまり手出ししていなかった。

ある企画者からは「チラシの置き方や情報発信の方法などの工夫やサポートをしてもらいたい」という意見が聞かれた。さらに「市民館は、同じ講座が何年も継続するより様々な講座が展開されることが良いと考えているが、何年か継続してこそ意味がある」と主張し、市民館側に理解されないと語っている企画者もみられた。

また市民館の館長と担当職員など行政内部での認識の違いを市民に感じさせる場面があったようだ。

「全くのボランティアだが、交通費程度は出してくれても良いと思う」との意見をもつ企画者もいた。また市民が「学級」の趣旨や協働を理解し行政との良好な関係が伺えた一方で職員の個人的なスキルや情報に依る部分の大きさも窺い知れる事例もあり、行政による組織的な対応が望まれる。

(4) 市民への拡がり、ネットワーク化の視点から

概して参加者が大変熱意を持って参加しており、「まずは参加することが大切」「川の美化活動を通じて別のグループと知り合った」「街で声をかけあえて知り合いが増えた」「自分がしてもらって嬉しかったことを次の人にもしてあげようという心がけが繋がりになると思う」「企画を進める上で身につけた能力を地域、幼稚園、学校等にまでも広げていきたい」という意欲ある意見も聴かれた。

大人だけの活動ではなく、子どもに関われたことで自分の活動に拡がりを持てたと感じたり、地域や学校の教員とふれ合ったりして知的好奇心が刺激されたとの意見もあった。職員からの誘いや、口コミ、友人への誘いがきっかけの大きな要素となった例も多い。

「自主企画は自然発生的には生まれないので、行政がきっかけを作っても良いが、やるのは市民な

ので、そのプロセスが大事」という意見もあった。「『学級』の開催時期も異なるので、他『学級』との交流の機会はほとんどない。」「他グループとの交流は市民館が音頭をとってやってほしい」等の意見が出された。

外国籍市民の「学級」では日本人も企画に共同参画することによってコミュニティの輪が広がったり、職員が他のグループなどに呼びかけたりして、「学級」が行われている事例もある。こういった呼びかけによって拡がりが進むと考えられる。

また地域には様々なテーマに興味を持つ人がいると話すグループもあり、自発的な拡がりにつながっていくことも期待される。また市民館や行政が調整することによって見学に行ける施設の幅も広がると感じている。

広く区民への参加を目指して区役所との協働を続けるなど、市民館で開催した「学級」で育ち、区役所の施策の一つとして活動が広がっている事例もあった。前年度に「学級」に参加した市民が新たな「学級」を立ち上げるきっかけを市民館職員が担った事例もあった。

「自分達が育ててもらってきたことを自分も伝えたいという市民が出て来ることを期待したい」が、一方で「事務の煩雑さ」は次の企画者を生む上でのネックになっているようだ。またネットワーク作りには最長3年間の期間では短いとの意見もあった。

「市民館は自主グループを育てると言っているが、部屋は限られているので、グループを増やすと使いにくくなる」と語るグループがあった。

また、「こんなに良い事をしているのだから他の市民も行政も賛同するのが当たり前」で、自分の考えに沿わない人を排除するような傾向が感じられた事例もある。しかし同じ地域でも、活動拠点の祭りやイベントに積極的に参加し、自発的に他への協力活動をしており、自らがどんどん輪を広げる行動と姿勢を取っている事例もあった。また、企画者と参加者の世代による意識の違いや齟齬もあるようだ。

(5) 子どもの参加の視点

子育てに関しては、多くの「学級」があるが、実際に子どもが参加しているものは少なかった。

また、企画者からは「学校の教室で子ども達に教えたかった」、「外国籍市民と触れ合う体験をさせたかった」等など言葉も聞かれ、子どもたちと共に大人も育ち合うという視点が希薄なのではないかと感じた。

(6) コーディネーター育成の視点

コーディネーターや中間支援組織の必要性から見た場合、特筆すべき事例を見出せなかった。

職員からの発言では、「コーディネーターとして関わっているつもりで、なるべく運営内容に立ち入らないようにしている」、「時間がかかるし職員がやっしまえば簡単だが」と言いつつ、「企画者の思いを引き出す」、「自主性を尊重しつつ、市民館との協働作業として必ず作業に関わるようにして

いる」、「参加者の中で企画に関わる人と企画者をつなげていくことが課題」との意見があった。

2 今後に向けての提言

これまで、「協働の意識の醸成」「行政支援の考え方」「個人利用者と市民活動の結びつけ」「地域の子どもの参加促進」、「コーディネーター、中間支援組織の育成等」の、5つのキーワードを使ってきた。しかし、これらのキーワードは、アンケート・聴き取り・職員座談会の調査結果にてらしてみた場合、協働の概念で包括できることが分かる。

そこで、「学級」の今後のあるべき姿を「協働の学び」に求め、以下9点にわたって提言する。

(1) 市民館を学びの舞台とする

企画提案数や共同企画者公募への自発的な応募、更に各「学級」への参加者の増加という課題は、市民館がいかに地域に開かれ、市民の学びの拠点としてどれだけ多くの市民に利用されるかという大きな問題に行き着く。「図書館には行くけど、市民館にはなかなか足を運ばない/限られた人しか市民館の利用がない/広報が市民館を利用しない市民に届きにくい」という声がある現状をいかに変えるか。そしてどうすれば市民館が「市民の学びの場」であることをひとりでも多くの市民に了解してもらえるか。図書館・市民館職員合同の研修会のテーマにするなど知恵を絞ることが必要である。

(2) 新たな学びをつくる

「学級」の参加者が次年度の共同企画者になるケースは多く見られるが、参加者が次年度の共同企画者になり、更に新規の企画者になる例はこの事業開始から満5年を迎える現段階では、まだ多くない。その中で、こと子育て支援に関する「学級」では、子どもの成長と共に大人の関心領域も変化することから、新規企画者が生まれることが多いようである。これは、子育て支援の学級参加者へ、学びへの働きかけをすることが有効であるということを物語っており、大人の学びの拡がりを考える上で重要なヒントとなり得る。学級参加者への市民館職員の働きかけは多く行われており、また功を奏している。職員のさらなる寄与を期待したい。

なお、市民の育ちのステップアップをどのくらいの期間で見ていくかについては、地域性等を考慮した運用も必要に思われる。

(3) 協働への理解

市民の協働への取り組み姿勢にはある程度地域性があり、また行政依存型と自主独立型という2つのタイプが散見される。川崎市全域の市民レベルの交流や研修の機会をつくることで市民の気付きを促し、協働に対する共通理解を深めることが必要であろう。「学級」企画者間のもとより、同じような活動をしている人達との交流には、市民からも要望が多い。

(4) 本当の自治をめざして

企画提案会は市民自治の大きな学びのステージである。現状では、企画の提案数と審査基準が明確ではないことから各館の審査状況が異なっているが、市民の無用の混乱を招かないために、審査の全市共通の基準が明確に示されることが肝心である。「提案はみな通ったけれど、結局予算が足りなかった／人の提案についてなかなか意見が言えない」など、その場をあいまいに収めても、その後の実施過程で様々な弊害が起きている。社会教育委員が企画提案会でオブザーバーの任を果たすなど、第三者機関が客観的な指標を出すことも検討されたい。

(5) 学びの道筋

「学級」に集った人々の自立をどう支援するか議論も重要である。会場使用料の軽減や自主的運営に向けての日常的なサポート体制の整備等に関し、今後、行政内部での検討を求めたい。今回事例にあったように、3年間「学級」を開設した後は区役所の協働事業に移行するなど、区役所との連携も考えられる。また、学習から活動に移行した後も、地域の市民活動拠点どうしの連携や、いつでも相談・学習ができるような市民の学びのサイクルが確立されることが望まれる。

(6) 職員の力量形成

「学級」における市民と職員との協働の成否は、市民の学びの自発性をいかに活性化させられるかにかかっている。多くの市民が職員に頼る部分がまだまだ大きい現状では、職員の意識のありようや力量が市民へ与える影響は強い。また、職員がコーディネーターとしての役割を果たすことへの期待は大きく、関連する活動をするグループとのネットワークの構築を求める市民の要望は強い。しかし、それを企画できる市民や職員は不足しがちなのが現状である。この事業を全市の学びの協働事業と位置づけるなら、行政内での職員体制や研修制度の整備を急ぐ必要がある。「学級」のテーマだけでなく、市民一人ひとりとの対応が必要となる職員にとって、職員研修の一環として、この事業への取り組みについて学ぶ機会が必要である。あわせて、専門職制度の確立によって職員の人材育成がされれば、協働への取り組み方は向上するであろう。

(7) 協働による評価の実施

市のあらゆる施策について事業評価は必要である。この事業が始まって5年経った今、担当者会議での情報交換にとどまらず、「学級」を学習における協働のモデル事業と位置づけ、市民による評価も取り入れるべきである。今回、多く意見が出された報告会・企画提案会の持ち方の工夫や、ざっくばらんに生の声を交わすことができるフリースペース等の場の確保なども検討されたい。また市民館だけでなく、市民や企画グループにとっても、この事業に参加して、目標がどのくらいの達成出来たか、出来なかったところはどこかなどを把握するために、まずは自己評価が必要であることは言うまでもない。

(8) 子ども支援に向けた行政間の連携

生きる力をつけるために、子どもの学校外の活動の場が必要度を増している。しかし、それと逆行するかのよう、子どもの自由時間が減少している現実がある。区役所に子ども支援室が置かれ、横断的な取り組みの強化が図られている。市民館・こども文化センター・学校などの地域の学びの拠点施設、ならびに区役所の主催事業等に、未就学児段階から親子一緒に気軽に行けるようにするなど、行政機関相互の連携の更なる促進が期待される。

(9) 学びの居場所への誘い

現在、市民の企画やコミュニティ活動を広報で知って参加した市民が、その学びの場を居場所として次のステップへと歩き出し、行政支援により、徐々に個人がつながり、市民の参加が広がり始めている。地道に市民と市民とがつながり、拡がりをつくる前提として、いかにして多くの市民へ学びのプロセスの提示や情報を届けるか、その手段としての広報は今後も大きな課題であるといえよう。

おわりに

今回の提言書は、これまで社会教育委員の会議が提言してきたことの中から、5つのキーワードを抽出し、これらが実際に現場でどのように具現化されているのかどうかに関して、「学級」を対象として検証を行なった。その過程の中で、協働の理解やあり方が、キーワード視点からの現状を左右していることが明らかになった。

行政の支援がどうあるべきかについては、まさに市民と行政の協議の中で双方合意の下に決定されるべきことである。協働についての理解が市民・職員共に深まり、現場の日々の作業の中で協働が具現化されなければならず、単に一方の足りない点をもう一方が補完するという役割分担のレベルに留まってはならない。ただ、市民は非常に多様であるために、社会教育という視点を持って状況に応じた判断が出来る専門性が行政には求められるであろう。

川崎市は、今年2月に「川崎市協働型事業のルール」⁵を策定し、そこでは、「協働」とは「異なる特性を持つ主体同士が共通の目的に向かって、それぞれの役割と責任の下で相互の立場を尊重し、対等な関係に立って協力すること」と定義している。協働はあくまで、目標達成のためのひとつの方法論に過ぎず、市民と行政がお互いの気付きをダイナミックに交換する相互作用を繰り返しながら、双方が学び合い双方の利益が得られることが大切で、それが共生意識を醸成する。

今回の「学級」はまさに学びに関する協働のモデルであり、市民・職員共に、その意義を認めていることが明らかとなった。今後、「学級」がますます地域の多くの市民に広がれば、「元気な川崎」になっていくであろうし、その為にも、今回の提言を真摯に受け止められることを切望する次第である。

最後になったが、調査にご協力いただいた多くの「学級」の関係者すなわち市民企画者の方々、「学級」に参加した市民の方々、各市民館の職員のご協力に改めて厚く感謝したい。

⁵ <http://www.city.kawasaki.jp/25/25tiiki/home/kyoudou/index.htm> からご覧いただけます。

参考資料

1 フィールドワーク実施状況一覧

班	館名	分類	フィールドワーク 実施日時	所属委員
南部班 川崎区 幸区 中原区	教育文化会館	子ども 関係	8月7日(火) 10:00～11:50	芳川委員 青木委員 石渡委員 岸委員 小林(美)委員 内藤委員 中村委員 横山委員
		地域 特色	7月18日(水) 10:00～12:40	
	幸市民館	子ども 関係	7月11日(水) 10:00～11:40	
		子ども 関係	7月13日(金) 10:00～12:30	
	中原市民館	子ども 関係	7月25日(水) 10:00～11:30	
		地域 特色	7月7日(土) 14:00～16:50	

* 幸市民館については、子ども関係学級しか予定されていなかったため、2つとも子ども関係の学級から選択

班	館名	分類	フィールドワーク 実施日時	所属委員
中部班 高津区 宮前区	高津市民館	子ども 関係	7月21日(土) 13:30～17:00	川西委員 石井委員 石垣委員 鈴木委員 堀井委員 小林(繁)委員
		地域 特色	7月4日(水) 15:30～17:25	
	宮前市民館	子ども 関係	7月24日(火) 9:30～13:00	
		地域 特色	7月18日(水) 10:00～13:10	

班	館名	分類	フィールドワーク 実施日時	所属委員
北部班 多摩区 麻生区	多摩市民館	子ども 関係	7月20日(金) 10:00～12:00	岩本委員 足利委員 岡崎委員 杉村委員 村井委員 蠟山委員
		地域 特色	7月19日(木) 10:00～12:15	
	麻生市民館	子ども 関係	7月19日(木) 14:10～15:50	
		子ども 関係	7月25日(水) 10:00～12:15	

* 麻生市民館については、日程調整の都合により、2つとも子ども関係の学級から選択

2 調査帳票・統計

(1) アンケート項目

過去に市民自主学級を企画したことがあるグループへアンケートをお願いした。

質問内容に、番号の選択もしくは自由記入により回答いただいた。番号の選択については、特に記載が

ない場合は一つのみ選択をお願いした。

Q1 どのような思い・目的で学級を企画しようと思いましたか？〈自由記述〉

《提案前段階》

Q2 「市民自主学級」という事業の趣旨や年間の流れや仕組み内容について、広報チラシはわかりやすいものでしたか？

1. はい 2. いいえ どんな点が？〈自由記述〉

Q3 提案前に市民館の職員に学級のことで相談しましたか？どんなことを尋ねましたか？〈自由記述〉

Q3-1 その時の市民館の職員の対応はいかがでしたか？

1. 良かった どんな点が？〈自由記述〉 2. 良くなかった どんな点が？〈自由記述〉

Q4 提案会前に職員から「市民自主学級」について説明があったものに丸をつけてください(いくつでも結構です。)

1. 学級の運営の進め方、方法 2. 学級の実施回数 3. 予算 4. 市民と職員の役割分担について
5. 提案書の書き方など事務書類の作成について 6. その他

Q4-1. 事前の説明で、もっと詳しく説明を受けたほうが良かったと思われることはどんなことですか？〈自由記述〉

《提案会》

Q5 提案会はどんな雰囲気でした？ 当てはまるものに をつけてください。

1. みんなが活発に協議できる雰囲気 2. みんなが自由に発言できる雰囲気 3. わからないことは言えない雰囲気
4. 1部の市民だけが話を進める雰囲気 5. 司会者の進行通りに進み市民の自由な発言が少ない雰囲気
6. その他〈自由記述〉

Q6 提案会で他の提案について話し合いをした際、その企画が公共的、公益的なテーマ(地域にとって必要な学習の内容であるか等)であるかどうかを意識しましたか？

1. はい 2. いいえ

《企画・運営実行段階》

Q7 共同企画者の募集はしましたか？

1. はい Q7-1 2. いいえ Q8

Q7-1 共同企画者の募集にあたって不安はありましたか？

1. はい 2. いいえ どうしてですか？〈自由記述〉

Q8 一般の参加者の募集にあたって不安はありましたか？

1. はい 2. いいえ どうしてですか？〈自由記述〉

Q9 共同企画者や参加者の募集はどのように行いましたか？ (丸はいくつでも結構です。最も有効だと思ったものに、 をしてください。)

1. 市民館だより 2. 市政だより 3. チラシ 4. 友人・知人 5. HP 6. その他〈自由記述〉

Q10 募集の時に、市民館担当職員からサポートを受けましたか？

1. はい どんな？〈自由記述〉

例：チラシの作成、印刷、配布、受付窓口など

2. いいえ

Q11 企画や運営にあたって、具体的に職員が支援してくれたと感じたことありましたか？

1. はい どのようなことですか？〈自由記述〉

例：提案会の前段階で企画の内容についてアドバイスをもらった、共同企画者や参加者の募集で支援があった、講師を紹介してもらった、など

2. いいえ

Q12 企画や運営にあたって、市民館の職員からあったらいいなと思う具体的な支援があったら教えてください。

1. 企画内容・企画の立て方
2. 講師紹介
3. 進行の技術
4. 予算の使い方
5. 関連する情報
6. その他<自由記述>

Q13 市民館職員との意思疎通、相互連絡はどんな方法で行いましたか？(はいいくつでも結構です。)

1. 電話
2. メール
3. 直接会って

Q13-1 意思疎通・相互連絡は十分でしたか？

1. 非常に良かった
2. やや良かった
3. あまり良くなかった
4. 全く良くなかった

Q13-2 (前の質問で2, 3, 4を選んだ方に)選んだ理由はどのようなことですか？

<自由記述>

Q14 学級運営途中で何か困ったことやトラブルがありましたか？また、それはどのようなことでしたか？

1. あった どのようなことでしたか？<自由記述>
2. なかった

Q14-1 そのトラブルは市民だけで解決しましたか？市民館職員はどのように関わりましたか？

1. 市民だけで解決した
2. 職員に相談した 職員はどのように関わりましたか？<自由記述>

Q15 学級運営を通じて他の企画者や参加者と良い信頼関係を作ることができたと思いますか？

1. はい
2. いいえ 理由は？<自由記述>
3. わからない

Q16 市民館職員とはお互いに良い信頼関係をつくることができましたと思いますか？

1. はい
2. いいえ 理由は？<自由記述>
3. わからない

Q17 学級の企画内容を考えるときに、子ども達がこれから地域の行事などに参加していけるようなアイデアや、子ども達が参加しやすくなるような工夫をしたことはありますか？

1. はい どのような工夫ですか？<自由記述>
2. いいえ

Q18 運営途中で、新しく活動してくれそうな人を見つけたり、そういう人を育てるような工夫を行いましたか？

1. はい どのような工夫ですか？<自由記述>
2. いいえ

Q18-1 (前項で「1. はい」と応えた方)新しく活動してくれそうな人を見つけたり、そういう人を育てるような工夫をする際、市民館職員はどのように関わりましたか？<自由記述>

《企画終了後》

Q19 学級の企画・運営を終えて、自分自身にとって良かったことは何ですか？(はいいくつでも結構です。)

1. 仲間が増えた
2. 知識が増えた
3. 地域のことがよくわかるようになった
4. 他の地域活動に関心・興味が増した
5. 顔見知りの職員ができた
6. 時間がつぶせた
7. その他<自由記述>

Q20 学級の企画・運営を終えて、自分自身にとって良くなかったことは何ですか？(はいいくつでも結構です。)

1. 時間をとられた
2. 仲間ができなかった
3. 知識が増えなかった
4. 地域のことが思ったほどわからなかった
5. 他の地域活動への興味関心が広がらなかった
6. 顔見知りの職員ができなかった
7. 出費がかさんだ
8. 人間関係がわずらわしかった
9. その他<自由記述>

Q21 今後学級の企画をするとしたら、どんな希望がありますか？(はいいくつでも結構です。)

1. 参加者が多いほうが良い
2. 新しい参加者が増えたほうが良い
3. 参加者は少なくてもよい
4. 知っている仲間と学級をしたい
5. 企画委員がもっと多いほうが良い
6. もっと学習内容を専門的に
7. 予算がもっとほしい
8. 会場をもっと自由に取りたい
9. 職員の関与をもっと増やしてほしい

10. 職員にはほっておいてほしい 11. 他の団体と連携してネットワークを拡げたい 12. その他<自由記述>

《全体》

Q22 前年度の参加者が次の年に企画委員として参加したり、他の企画の委員になったケースはありますか。あったとしたら、どの位の人数ですか。

1. なかった 2. あった(人くらい)

Q23 全般を通じて、市民館担当職員から受けたサポートで、一番良かった、助かったこと、良くなかったことはどんなことですか？

1. 良かったこと<自由記述> 2. よくなかったこと<自由記述>

Q24 今回の学級をきっかけに、他のグループ等との交流などは生まれましたか？

あったとしたら、どういうきっかけでどのような交流が始まりましたか？

1. なかった 2. あった きっかけは？<自由記述> どんな交流？<自由記述>

Q25 今回の学級は、これから自分達の活動を地域に広げたり、地域の役に立つための取組みを新しく始めるようなきっかけになりましたか？

1. なかった 2. なった どんな取組み？<自由記述>

Q26 メンバーがお互いのノウハウや情報を交換する場が必要だと思いますか？

1. 思わない 2. 思う どんな場？<自由記述>

Q26-1 互いのノウハウや情報を交換するには、どのような行政の支援があると良いですか？<自由記述>

Q27 企画・運営の仕組みについて改善した方がよいこと、その他なにか御意見があれば自由にお書きください。<自由記述>

(2) 聴き取り調査項目

教育文化会館及び各市民館へ出向き、平成19年度に自主企画学級を実施しているグループへ聴き取り調査を行った。

ここに掲げるのは、その調査の基本聴き取り項目となる。実際には、企画や講座の進捗状況、グループの状況をみながら、項目を省略したり、追加したりして調査を行った。

企画市民側へ、学級への想い、学級の趣旨の説明をお伺いする。

- ・ 皆さんのグループはどのような集まりのグループですか？
- ・ この学級をどうして始めようと思われましたか？
<継続の学級へは>再び、学級を開催してみようと思ったのは、どうしてですか？

共通質問項目をもとに、お話を伺う。

提案段階

- ・ 市民自主学級について、どこで知りましたか？広報は分かりやすいものでしたか？
- ・ 市民自主学級・市民自主企画事業の趣旨や内容について、どのような事前説明を受けましたか？
- ・ 企画委員と市民館職員との役割分担(例：互いに出来ること、出来ないこと)等について受けた説明はありましたか？それは、どのようなものでしたか？
- ・ 提案書の作成・提出に際し、何か不安はありませんでしたか？市民館担当職員へは気軽に相談できましたか？よろしければ、相談した内容や、その時受けた市民館職員からのサポートについて教えてください。

提案会

- ・ 提案会は、どんな雰囲気でしたか？その時の様子を教えてください。お互いが自由に発言できる雰囲気でしたか？

- ・ 提案会で他のグループの提案について話し合いをした際、その企画が地域にとって必要な学習内容であるかどうかを意識しましたか？
- ・ 提案で工夫をしたことはありますか？

企画・運営実行段階

- ・ 共同企画者や参加者の募集はどのように行いましたか？その時に市民館担当職員からはどのようなサポートを受けましたか？
- ・ 市民館職員から受けたサポートで、良かった、助かったということはどんなことでしたか？
- ・ 市民館職員との意思疎通はスムーズにとれましたか？意思疎通はどのように行っていましたか？
- ・ 途中で不安や何か困ったことやトラブルがありましたか？どのように解決しましたか？
- ・ 地域の子供たちが参加しやすい工夫はありますか？それはどのようなことですか？
- ・ 学級の中で、受講者同士や受講者と企画者とのつながりが持てるような工夫をしていますか？それはどのようなことですか？市民館職員のアドバイスはありますか？

企画終了後の反省・評価時点の検証

- ・ 学級の企画・運営を終えて、いかがでしたか？どんなことを感じましたか？自分自身が成長したと感じたり、能力が高まったと感じたりしたことはありますか？それはどのようなことでしたか？
- ・ 学級の企画・運営を終えて、反省や今後への改善など感じられたことがあったらおしえてください。
- ・ 昨年度の参加者が企画委員となったケースはありますか。それはどの位の人数ですか。(多い・少ない その原因はどんなことだと思われますか？)

<その場にいらした場合>

受講したきっかけは何でしたか？受講者から企画者へ変わった時に心配はありませんでしたか？

全体を通じて

- ・ 全般を通じて、市民館担当職員から受けたサポートで、良くなかったこと、もっとこんなことをして欲しかったということとはどんなことですか？
- ・ 今回の学級をきっかけに、他のグループ等との交流などは生まれましたか？それはどのどんなきっかけで、どんな形での交流ですか？
- ・ 今回の学級を契機に、自分の地域生活に変化があったらおしえてください。自分達の活動を地域に広げていく、また、地域の役に立つための取組みを何かされていますか？
- ・ 今回の学級を契機に、自分の地域生活に変化があったらおしえてください。自分達の活動を地域に広げていく、また、地域の役に立つための取組みを何かされていますか？

その他

- ・ 互いのノウハウや情報を交換する場が必要だと思いますか？それはどのようなものかいいと思いますか？そこには、どのような行政の支援があるといいと思いますか？

(3) グループ・インタビューの概要、質問項目

教育文化会館及び市民館地区館において、振興係長等、市民自主学級の全体的な取組みが分かる職員に集まってもらい、グループ・インタビューを行った。

基本項目

- ・ 自己紹介（現勤務館、氏名、市民自主企画事業・学級との関わり歴、現在の勤務館における事業・学級の実態）

企画提案会までの評価

- ・ 提案会の広報は、市民に行き届いているか？どのような方法で広報しているか？
提案数については、どのように思っているか？多い・少ないについて、どのように感じているか？少ない場合はどのようにしているのか？
- ・ 個人の市民の想いをどのように形にするのか？相談を受けるか？そのとき、どのようなサポートをしているのか？
- ・ 提案会の雰囲気は？職員として注意すること、困ったことは？
- ・ 市民のプレゼンテーション力や思いをどのように思っているか？
- ・ 市民同士の質問や、協議の様子は？
- ・ 提案を選定するにあたって、留意していることは？不採用の提案はどんなものか？
- ・ 市民の提案内容を全体的にみでの印象は？ 市民館主催事業との兼ね合いは？
- ・ 提案会への市民からの要望は？
- ・ 提案会の実施に関してこんごの改善案などがあるか？
- ・ 各提案にたいしての担当決めで困ること、配慮していることはあるか？

企画会についての評価

- ・ 個人提案の場合、どのように企画委員を集めているか？市民の苦勞と職員のサポート内容は？
- ・ 企画会議の様子は？集まった企画者の合意はとれているか？
- ・ 企画会の運営上、市民から相談されるのはどんなことか？
- ・ 講師選定など、カリキュラムづくり（学級）で市民が困っていることは？それに対してどのようなサポートをしているか？
- ・ 企画のカテゴリーによって、職員の配慮や苦勞は異なっているのか？
- ・ 市民への広報活動において、困っていることは？どんな方法を採用しているか？その方法で、期待した人数は確保できているか？人数が集まらないときはどのようにしているのか？その時の、市民と職員の分担はあるのか？

企画運営実行段階の評価

- ・ 参加者の参加状況は？毎回の継続率は？市民同士の雰囲気は？途中で何かトラブルはなかったか？どんなもの？それほどどのように解決したか？職員としての関与は？
- ・ 参加者の満足度は、どうか？どのように図っているのか？
- ・ 実行プロセスにおいて企画委員に変化はみられたか？

企画終了後の反省・評価

- ・ 終了後の反省会の様子は？
- ・ 次年度に深化する継続の意向はどのくらいみられるか？その要因はなんだと思うか？
- ・ 市民からの反省や改善の要望で多いものはどんなこと？
- ・ 企画者の狙いや目的は達成できたと感じているようか？どんなところからそう思うのか？

この仕組みについて

- ・ 3年間の取り組みを経て、どんな評価を持っているか？今後に向けての感想や意見は？改善案など
- ・ 市民に対して、職員として注力したいことは？
- ・ 職員自身として、行政からの支援など要望は？

3 社教委員活動

(1) 2カ年の活動経過

平成18年度の審議経過

年 月 日	会議名	会 場	主な内容
平成18年			
5月16日	第1回定例会	教育会館	正副議長及び各種委員の選出、生涯学習推進活動概要について
6月16日	(第2回定例会) 県社会教育連絡協議会総会	横須賀市	平成18年度事業計画・予算案、役員について
7月25日	第3回定例会	高津市民館	各種委員の選出、各種大会、研究テーマについて
9月26日	第4回定例会	中原市民館	各種大会、研究テーマについて
10月24日	第5回定例会	高津市民館	研究テーマについて
11月28日	第6回定例会	中原市民館	研究テーマについて
12月 7日	拡大正副議長会議	高津市民館	研究テーマについて
12月12日	第7回定例会	中原市民館	各種大会、研究テーマについて
平成19年			
1月16日	教育委員会懇談会	本庁	地域社会の再構築等について
1月16日	拡大正副議長会議	本庁	過去の提言等の検証について
2月13日	拡大正副議長会議	大山街道ふるさと館	指定都市社会教育連絡協議会、検証事例の選定について
2月27日	第8回定例会	高津市民館	指定都市社会教育連絡協議会、平成19年度社会教育関係団体への補助金の交付、研究テーマの選定等について
3月 8日	研究検討小委員会	高津市民館	検証の進め方について
3月27日	第9回定例会	中原市民館	各種委員の選出、指定都市社会教育連絡協議会、平成19年度生涯学習推進活動方針案、過去の提言検証の進め方について
4月24日	第10回定例会	多摩市民館	平成19年度生涯学習部主要事業及び予算、県社連協総会、過去の提言検証について

平成19年度の審議経過

年 月 日	会議名	会 場	主な内容
平成19年			
5月29日	第1回定例会	中原市民館	議長の選出及び各種委員の選出、今後の研究活動等について
6月26日	第2回定例会	中原市民館	各種委員の選出、各種大会、各班からの経過報告、フィールドワークの内容・方法について
7月24日	第3回定例会	高津市民館	各種大会、アンケート、職員への聴き取り調査、分析作業について
8月13日	臨時研究会議	高津市民館	フィールドワーク結果の整理・分析、今後の研究活動の進め方について
8月28日	臨時部会	多摩市民館	フィールドワークの分析結果(途中経過)、その他調査の進捗状況について
9月25日	第4回定例会	高津市民館	各種大会、県社連協総会、研究活動の経過報告、調査結果の整理・分析作業について
10月10日	拡大正副議長会議	高津市民館	調査結果の検証、研究の進め方について
10月23日	第5回定例会	生涯学習プラザ	各種大会、県社連協総会、アンケートの整理結果、今後の研究の進め方について
11月27日	第6回定例会	高津市民館	県社連協総会、提言書の執筆、研究の原状と今後の進め方について
12月18日	第7回定例会	中原市民館	各種大会、今後の研究の進め方、調査結果の検証について
平成20年			
1月8日	編集委員会	高津市民館	提言書のまとめ方について
2月4日	編集委員会	高津市民館	提言書のまとめ方について
2月18日	編集委員会	大山街道ふるさと館	提言書のまとめ方について
2月26日	第8回定例会	中原市民館	平成20年度社会教育関係団体への補助金の交付、提言書の校正について
3月13日	編集委員会	中原市民館	提言書の編集
3月25日	第9回定例会	高津市民館	指定都市社会教育連絡協議会、提言書のまとめについて
4月22日	第10回定例会	中原市民館	平成20年度生涯学習推進活動方針について、全体の総括

(2) 2カ年の委員名簿

平成18年度・平成19年度 川崎市社会教育委員名簿

氏 名	役 職 名	備 考
横 山 吉 雄	市立南河原小学校長	
下 田 昭 雄	市立南加瀬中学校長	平成19年4月23日まで
鈴 木 眞 一	市立南河原中学校長	平成19年4月24日から
椿 道 雄	市立橘高等学校長・高津高等学校長	平成19年4月23日まで
岸 秀 治	市立総合科学高等学校長	平成19年4月24日から
吉 田 正 和	川崎地域連合副議長	平成18年9月30日まで
石 垣 喜 久 雄	川崎地域連合副議長	平成18年10月1日から
西 山 克 枝	市PTA連絡協議会会長	平成18年6月30日まで
内 藤 春 子	前市PTA連絡協議会会長	平成18年7月1日から
青 木 恵 美 子	市地域女性連絡協議会副会長	
小 林 美 年 子	市青少年育成連盟副理事長	
堀 井 岳 洲	市総合文化団体連絡会理事	
石 渡 敬 一	社団法人川崎市幼稚園協会振興部委員	
吉 房 正 三	市全町内会連合会常任理事	平成18年7月31日まで
石 井 康 昭	市全町内会連合会常任理事	平成18年8月1日から
蠟 山 優 二	市レクリエーション連盟理事長	
足 利 志 保	市 民 公 募	
杉 村 寿 重	市 民 公 募	
斉 藤 正 彦	川崎市主任児童委員部会長	(平成19年2月28日まで)
村 井 祐 一	田園調布学園大学人間福祉学部准教授	平成19年4月24日から
芳 川 玲 子	東海大学文学部教授	(平成19年5月29日から)
中 村 紀 美 子	人 権 擁 護 委 員	
川 西 和 子	宮前区地域教育会議議長	(平成19年5月29日まで) (平成19年5月29日から)
岩 本 陽 児	和光大学人間関係学部准教授	
岡 崎 チ ズ ル	かわさきチャイルドライン代表	
小 林 繁	明治大学文学部教授	

平成18・19年度

川崎市社会教育委員会議による提言書

「協働の学びを求めて」

平成20年(2008年)3月

編集 川崎市社会教育委員会議

発行 川崎市教育委員会事務局

生涯学習部生涯学習推進課

044-200-3303

E-mail:88syogai@city.kawasaki.jp

印刷 長谷川プリント

電話 044 - 766-2335

e-mail:hasegawa.print@nifty.com